

編集後記：今月号に掲載されている「学位論文」の記事で、色々なタイトルを見ているうちに興味をそそられた方も多いのではないのでしょうか。国内の博士論文は、授与機関である大学等の附属図書館などのほかに、国立国会図書館でも所蔵されています。2013年4月以降に提出された博士論文は、原則として各大学等を通じてインターネットで公表する規則になっているようで、さらに閲覧しやすくなっています。

それに比べると、修士論文あるいは卒業論文に至っては、それほど目にする機会がないようです。博士論文と違って、その一部が原著論文として世に出ない場合も多いでしょう。若い学生の情報リテラシーや感性は目覚ましく、修論や卒論だけで埋もれてしまうにはもったいない成果も多々あるように思います。ぜひ、「天気」の論文や短報への投稿もご検討ください。

卒業後にその分野の研究開発に携わるわけでもなく、企業や省庁に就職する場合は、論文として残す必要性を本人が感じないかもしれません。しかし、長い

キャリアの途上では予想外の転機もあり、様々な場面で、それが自分の主要な実績の一つとして使えることもありそうです。

自身の拙い経験で恐縮ながら、一般業務に従事していた頃に、ある省庁の海外派遣プログラムに応募したことがあり、応募用紙には著作物を記入する欄がありました。記入の注意書きには、「卒業論文でもよい」とあったので、何もなかった私は、忘却の彼方にあった卒論を引っ張り出して、そのタイトルを書く羽目になりました。その後、修士課程に社会人入学する機会を得たものの、二足わらじでは修論を仕上げるので精一杯で、論文投稿には至りませんでした。さらに数年を経て、思いがけず研究機関へ異動になり、現在は、大学の博士課程にも在籍しつつ、我が子とほぼ同世代の学友と机を並べています。こんな調子で自分のことは棚に上げていて、説得力は今ひとつかもしれませんが、悪い見本くらいにはなったでしょうか。

(大塚道子)